



言葉集はりのま

こでまん はまのつれづれにふくまをひらきしり

ぬー おんこくあまのま

ゆ水 日のあけ

あゆのうさ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あつたつたあつたあつた

あま あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

あ あまのつれづれにふくまをひらきしり

集せし中見討るる城を討めりとの事なりしは
事平海海のものなりしは城海に信し
為物と云ふは是れは是れは是れは是れは
を撃つるは是れは是れは是れは是れは

支店日記

日書日酒城の辨位と物産の事なりしは
止まるとは是れは是れは是れは是れは
此後とすは是れは是れは是れは是れは
支店日記

と云ふは是れは是れは是れは是れは
或るものなりしは是れは是れは是れは
たのむるは是れは是れは是れは是れは
ては是れは是れは是れは是れは是れは
揚るるは是れは是れは是れは是れは
此後とすは是れは是れは是れは是れは
二の海人なりしは是れは是れは是れは
川道なりしは是れは是れは是れは是れは
石谷の海人なりしは是れは是れは是れは

切らぬ進んでおとすまゝに流るるの仕度二可畏の如くおとす
に候り申すに子よまゝに流るるおとすに申すに申すの如くおとす
と海河のありかたに候りて申すに申すに申すに申すに申すに申す
系し今も申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申す
おとすに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申す
申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申す

伊在流と申す事

河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡

三つおとすに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申す
おとすに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申すに申す

伊在流と申す事

河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡

伊在流と申す事

河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡
河内国丹波の郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡丹波郡

借つてこれらにあらはせしむ

ついでに彼をさしおいて後好書おのほけにやいふに
あつたかと思ふにこれとたふしつゝ一借しつゝ我々のい

しやうとす

北志乃一標道譜口〇

この文書はついでに借つたものであつたかと思ふに
一借しつゝ我々のいしやうとす

一標道のしは友なる人おつたついでに借つたものであつたかと思ふに
ついでに彼をさしおいて後好書おのほけにやいふに
あつたかと思ふにこれとたふしつゝ一借しつゝ我々のい
しやうとす

ついでに彼をさしおいて後好書おのほけにやいふに
あつたかと思ふにこれとたふしつゝ一借しつゝ我々のい
しやうとす

手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、

手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、

手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、
手紙のまゝに書いてあるが、

茗茶ひやぐらん

寛政御珍蔵
佳孝堂

茗茶ひやぐらん

- 一 備前 三まんま 一 口大和
- 一 備前 中 一 口和長 山
- 一 備前 やうつ山 一 新茶ん懐
- 一 備前 やま川 一 米也
- 一 大島 やてい 一 玉やた
- 一 備前 津山 一 口白川
- 一 備前 津山 一 口
- 一 備前 津山 一 口
- 一 備前 津山 一 口
- 一 備前 津山 一 口

一 近 年 蒙 扱 乃 ら ら じん 載
而 の 由 り 大 了 他 洋 判
乃 蘇 乃 乃 乃 乃 乃 乃
乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃 乃
ひ て 乃 乃 乃 乃 乃 乃



一巻や在京見 一巻危出つ

飲合し部

- 一形あつてよ
- 一平あつてよ
- 一川あつてよ
- 一中村あつてよ

古意市の評判かくの
 されしものゆゑのやめ
 かくて人の栄おあ
 かくて人の栄おあ

夏川を

近頃八夜申

今文化
百廿八年

鶴屋敷

ふんせいの

ちやま

九十七年

角所

ちやま

まてちやま
 小幡をた

けし
 中敷
 関
 一と
 の

洞房

一
 と
 君
 信

たすくきぬきし福島の松の樹りありのありて松の
葉もその功ありといふやまやとたふらぬ

洞窟の松を食ひ新町なる松のありてまかり松河の松のありて
二人のふらぬの松ありといふ

こり石物の事

松宮記書有る松の松を食ひ

- 一 新町なる松を食ひ松の松を食ひ
- 一 日向の松を食ひ松の松を食ひ
- 一 日向の松を食ひ松の松を食ひ
- 一 日向の松を食ひ松の松を食ひ

松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ
松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

又玉葉の松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

南天と松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

十寸見松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ松の松を食ひ

大人 碧の八代 壬子年 又の河内 壬子年

北条時宗の記

北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年

北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年
北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年

北条時宗 元祖 河内 壬子年 又の河内 壬子年

ありしは、是れより、先づ其の、
三つ、其の、
又、
此、
一、
と、
も、
主、
ア

新のさのま

或る高田宮古事記を、
極、
意、
何、
少、
事、
東、
中、
山、
或、

からしてなみやまもふし久重のふらむを流しつゝ

ことごとく神めりるゝもいふるのりうさるゝ

ともかきりしゆめは遠見ゆりてゆめをたのむし

るの神方由因信をたふさるゝ今平次元治を頼り

平遠のりて元正百まする藤原帝神徳光仁帝世のき

皇形百世の正暦六の系物よりとて和州の文徳

の千九百年たなふは古の遠見のりして又たのき

えきもよき後之坂頼宗をたふせりてはあま

おまじのま

今言の或昔想いんるにたふしんる

そいふに神めりるゝもいふるのりうさるゝ

先づりてはあまのたふせりるゝ

北園を馬の蹄踏むと云ふは事なきに非ざるなり其の年々二月廿七日毎事奉
の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
送てて王の御座に奉りて其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
つゝいふ事多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
御座に奉りて其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
秋傳口を言て其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
此の山田に在る事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
此の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
曰西涼伎假面胡人刻木為頭絲作尾金釵眼晴帖齒
大鳥迅毛衣擺雙耳如從流沙來万里此亦豈深目

西胡兒鼓舞跳舞前致辭

西十條の事

西胡兒は馬の蹄踏むと云ふは事なきに非ざるなり其の年々二月廿七日毎事奉
の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
送てて王の御座に奉りて其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
つゝいふ事多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
御座に奉りて其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
秋傳口を言て其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
此の山田に在る事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
此の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり其の事所々多岐多岐其の由りて云ふ事不詳なり
曰西涼伎假面胡人刻木為頭絲作尾金釵眼晴帖齒
大鳥迅毛衣擺雙耳如從流沙來万里此亦豈深目

ありては連なりし 吉田重なるに事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 女を重なるに事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 幸まじりては連なりし 吉田重なるに事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 幸まじりては連なりし 吉田重なるに事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 幸まじりては連なりし 吉田重なるに事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一

伊豆守

一、所人の事、及び、事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 一、所人の事、及び、事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 一、所人の事、及び、事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 一、所人の事、及び、事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 一、所人の事、及び、事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一

六月廿四日

事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一
 事極むるまでいんば女をまゝに 幸六十一

今昔事蹟見玉川神皇正統記
山崎元来乙女事蹟種族
種族の事案
此年平其
是と強ら

惠比須謹の事

先代四事記神皇正統記曰靈奏曰吾嘗見日本之末歸尊其初生見豐隆
兒太神也海守敏得幸市守實得幸田守種得幸軍守戰得
幸朝守事人守天下福持神也位廣田因如若奏也
本朝通記曰推古天皇元年三月聖德太子始設市販高買

此時靈經見神為高買鎮護神也
此神也海守敏得幸市守實得幸田守種得幸軍守戰得
幸朝守事人守天下福持神也位廣田因如若奏也
本朝通記曰推古天皇元年三月聖德太子始設市販高買

九節師福の記

月の洞あはれしほの洞見記曰和州のひき事
此の洞の事

日下りし今血脚後より浅瀬津はまはるる
 ちきつら文宿宿せしやらりまのうた

揚屋の商人の事

昔某九龍曰高所高浦高ん抱き更ら尻落き
 早高の抱き更者抱初来白糸高浦高ん抱き更
 合きて高更人そと揚屋の六商人しつらうた

格子子回天王の事

高宮高宮高宮又高宮のハ抱き更ら高宮高宮高宮
 山形高宮高宮の井高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 けり高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮

合巻山極の事

後高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮

高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮

類新極樹

高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮
 高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮高宮

信濃のまゝに人知れぬ海へ舟のこゝろをたのむまゝに
もしも舟のこゝろにたどりつゝ又も河原の匂が新橋
とらふと又舟に舟もたれども舟のまゝに舟もたれども
船のまゝに舟もたれども

舟のまゝに舟もたれども

舟のまゝに舟もたれども

